

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04421

研究課題名(和文) 社会科における副読本のメディア構成と活用法に関する研究

研究課題名(英文) Research on Media Composition and Effective Utilization of Supplementary Readers in Social Studies

研究代表者

松本 康 (MATSUMOTO, YASUSHI)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：60229581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：社会科副読本の使用実態と効果的な活用法を明らかにするために、長野県内の小中学校用の25冊の副読本を収集し、内容分析を行った。以下の4点が見いだされた。(1)編集者・発行者・使用される教科の視点から、社会科の副読本には多様性が認められる。(2)想定される学習形態の類型には「資料集型」「読み物(トピック)型」「教科書型」「学習帳型」「混合型」などがある。(3)タイトルと内容に独自性を含むものがある。(4)副読本に含まれる全学習問題973個の分析から、学習問題として「具体的事実」「関係・比較」「一般化・説明」「予想・説明」「価値」「学習者」「学習活動・作業」の7類型が見いだされた。

研究成果の概要(英文)：As a result of collecting 25 Supplementary Readers (SRs) used in Elementary and Junior High Schools in Nagano Prefecture and analyzing its contents, with the aim of clarifying the actual situation of use of Social Studies SRs and effective use, the following four points have been found. (1) Diversity of SRs was recognized from the viewpoint of editors / publishers / subjects to be used. (2) There are types such as "Data Type", "Reading Material (Topic) Type", "Textbook Type", "Study Note Type", "Mixed Type", etc. (3) There are things that include Identity in titles and contents. (4) From the analysis of 973 Learning Problems (Questions) included in SRs, seven types "Specific Facts", "Relation / Comparison", "Generalization / Explanation", "Prediction / Thinking", "Value", "Learner", "Activities /Work" were found.

研究分野：教科教育

キーワード：社会科 副読本 地域教材 学習問題

### 1. 研究開始当初の背景

社会科において具体的な地域教材を扱う副読本は重要であり、歴史的にも多くの都道府県・市町村で独自の副読本が作成・使用されてきている。副読本に盛り込むべき内容や教材の開発は盛んにおこなわれているが、授業作りのプロセスの中にどのように副読本が位置づけられ、教科書や他の教材・メディアとともに、どのように子どもの学習の文脈の中に位置づけられているかは明らかではない。

副読本を扱った先行研究の多くは、吉田正生(1997)のように、特定の教育内容が副読本にどのように反映されているかという観点に立つものである。副読本そのものを対象とする研究には、伊藤裕康(2003, 2004), 下地史彦(1996)があるが、これらは教材としての副読本が作られるプロセスに焦点を当てたものである。

一方、松本康(1994)は社会科に使われるメディアを分類し、学習者の「情報伝達」「情報整理・加工」「情報収集・蓄積」のどの文脈に位置付くかによって、メディアの機能が変わることを明らかにした。この視点から副読本を見ると、副読本は教科書と同様に「情報伝達」の文脈に位置することが多いと考えられるが、学習の進め方によっては「情報伝達」以外の文脈に位置づけられる活用法もありうる。

### 2. 研究の目的

本研究は社会科副読本を収集し、内容分析による類型化を行う。さらに、インタビュー調査、授業観察によって、社会科副読本の使用実態とメディア的な機能、および効果的な活用法を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1)副読本の定義

ここでは副読本を「冊子の形でまとめられた教材集」と定義し、地域の教員や研究会が編集主体となっていること、全国版の教科書に含まれない、その地域独自の教材が含まれること、少なくとも1つ以上の自治体単位で現在使用されていること、と特徴付けた。

#### (2)副読本の収集作業

対象：長野県内の市町村において使用されている小学校社会科・中学校社会科の副読本(計25冊)を郵送または直接訪問によって収集した(2015年6月~8月)。自治体作成は市レベルまで。町村レベルは2例。

インタビュー：収集時に各副読本の属性についての若干のインタビューを行い、副読本の性格を確認した。

#### (3)内容分析

収集された副読本について、以下の視点から内容分析を行った。

副読本の形態の分析

副読本の内容の分析(タイトル、キーワ

ード、独自性、防災教育)

学習問題(問い)と想定される使用法の分析

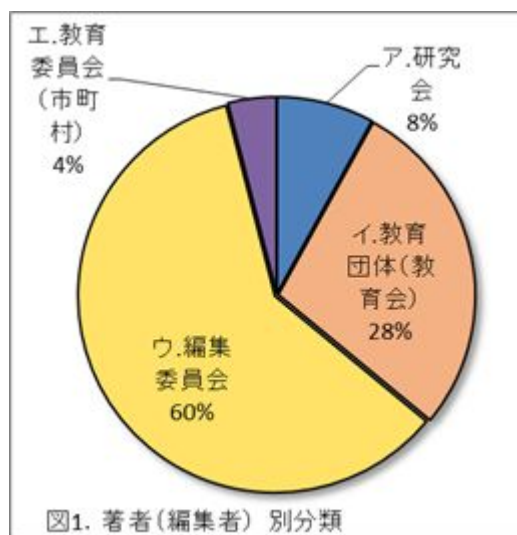
#### (4)インタビュー

副読本の作成背景、使用実態等について、教員を対象とするインタビュー調査を行った。

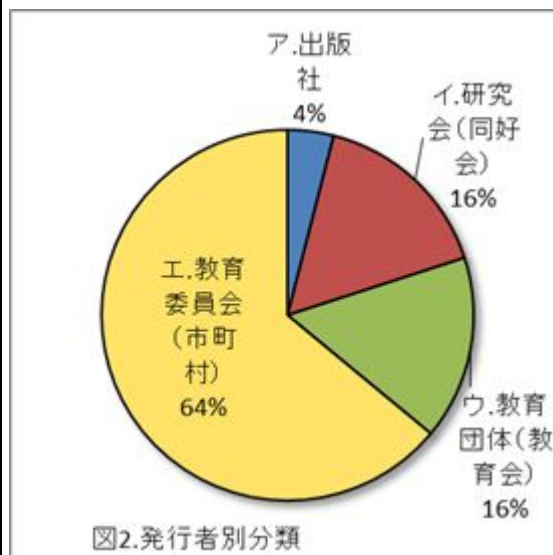
### 4. 研究成果

#### (1)副読本の形態の分析

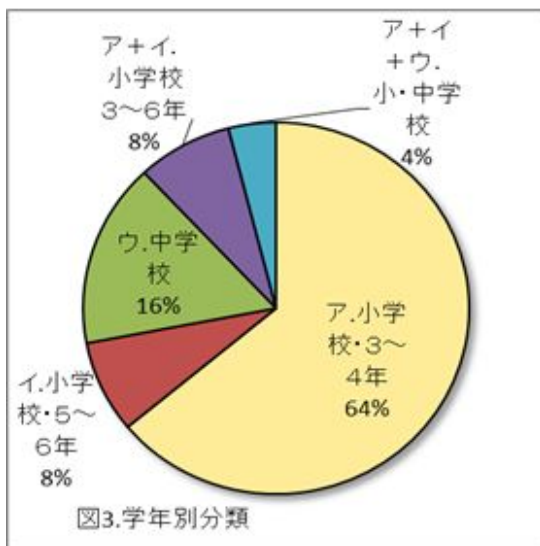
著者別分類：著者(編集者)別に見ると、編集委員会式が最も多く(60%)、教育団体(教育会)(28%)、研究会(8%)、教育委員会(4%)と続く(図1)。



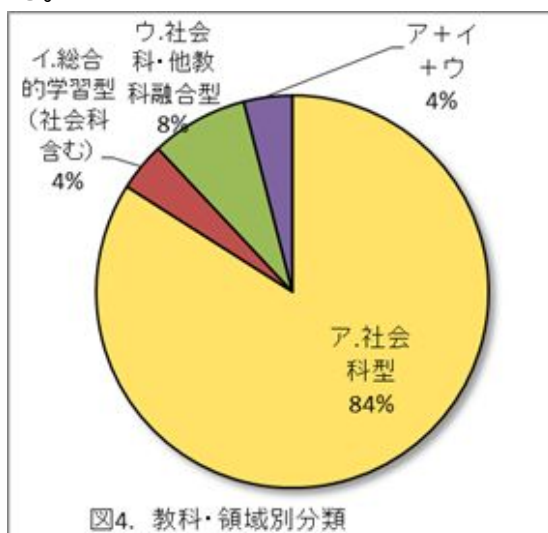
発行者別分類：発行者別では教育委員会(64%)、研究会(同好会)(16%)、教育団体(教育会)(16%)、出版社(4%)の順である(図2)。教育委員会が発行するものは公立学校への配布を前提としている。編集委員会が編集し、教育委員会が発行するものが全体の56%を占める。



学年別分類：副読本が対象としている学年は小学校3～4年用が最も多く(64%)、中学校用(16%)、小学校3～6年用(8%)、小学校5～6年用(8%)と続く(図3)。小学校中学年の地域学習のニーズに合わせて作られる副読本が多く、高学年用や、3～6年の全学年の学習を想定するものもある。中学校が少ない理由は、中学校では全国版の共通の資料集を使うことが多く、今回の収集対象(地域教材を扱う副読本)が少ないためである。



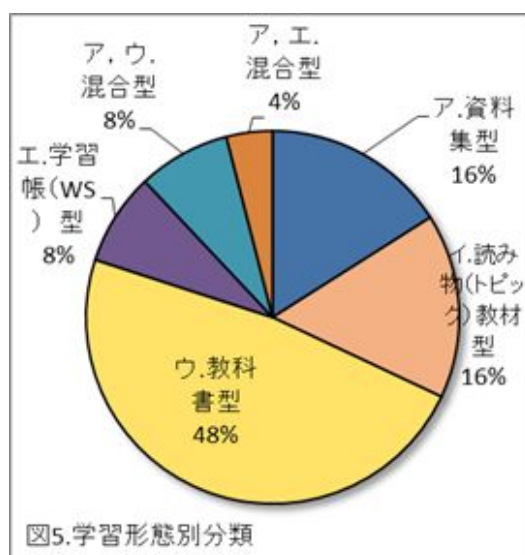
教科・領域別分類：教科・領域別では、「ア. 社会科型」(84%)、「ウ. 社会科・他教科融合型」(8%)、「イ. 総合的学習型(社会科含む)」(4%)、「ア+イ+ウ(混合型)」(4%)である(図4)。「ウ. 融合型」では社会科と理科の融合型(自然編・社会編に分けたもの)が見られる。



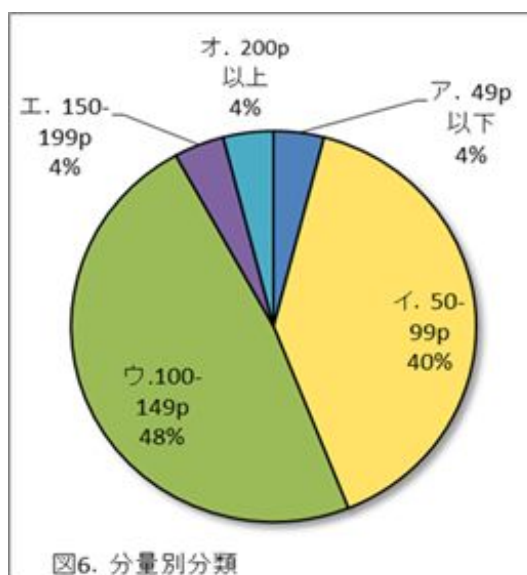
学習形態別分類：副読本の記述から、その副読本が主に想定する学習形態を表1の基準により分類した。ア～エの4タイプと混合型が認められた。「ウ. 教科書型」(48%)が最も多く、「ア. 資料集型」(16%)、「イ. 読み物(トピック教材)型」(16%)、「エ. 学習帳(WS)型」(8%)、「ア, ウ. 混合型」(8%)「ア, エ. 混合型」(4%)と続く。(図5)

表1. 学習形態と分類基準

学習形態	分類基準
ア. 資料集型	資料のみ。または資料+説明。
イ. 読み物(トピック)教材型	統一的なコンセプトに従って全体が記述され、事項の理解を中心とするもの。
ウ. 教科書型	学習問題、資料、説明、学習活動が含まれるもの。
エ. 学習帳(WS)型	ワークシートが含まれ、記入可能な形のもの。
ア+ウ. 混合型	資料集型に近いが教科書型の特徴を含む部分もある。
ア+エ. 混合型	資料集型に近いが、ワークシートが含まれるもの。



分量別分類：副読本のサイズはA4(52%)、B5(48%)である。分量は「100-149p」(48%)、「50-99p」(40%)が大半を占める、「49p以下」(4%)、「150-199p」(4%)、「200p以上」(4%)と続く(図6)。

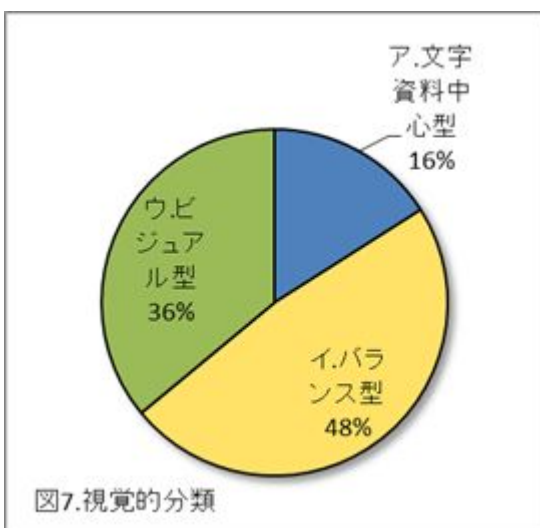




視覚的分類：文字，図表，地図，写真等がどの程度の比率で含まれているかについて，表2の基準で分類し，副読本の特徴を3つのタイプに分類した。「イ・バランス型」(48%)が最も多く，「ウ・ビジュアル型」(36%)，「ア・文字資料中心型」(16%)と続く(図7)。

表2．視覚的分類の基準

視覚的分類	分類基準
ア.文字資料中心型	文字の比率が多く，図表・地図等の資料を含む。
イ.バランス型	文字と写真・図の比率が同程度のもの。
ウ.ビジュアル型	文字の比率より写真・図の比率が多いもの。特に写真を多く含む。



(2)内容に関する分析

タイトルに使われるキーワード

副読本を特徴づけるものとして，副読本のタイトルの用例を分析した(表3)。タイトルキーワードとして良く使われる言葉は「私たち(私たち)」「郷土」「ふるさと」の3語である。「私たちの(わたくしたちの)」を含むものが72%，「『郷土』+自治体名(地名)」が24%，「ふるさと」が16%。さらにこれらの用語の重複例が2タイプある。

表3．副読本タイトルに使われるキーワード

キーワード	%
「私たちの(わたくしたちの)」+自治体名	72
「郷土」+自治体名(地名)	24
「ふるさと」+自治体名	16
(「私たちの」+「ふるさと」+自治体名)	(8)
(「私たちの」+「郷土」+地名)	(4)

注)全冊数(25)に占める割合。重複含む。

目次・項目の内容：目次・項目の内容を分

析した結果，ア)学習指導要領に準拠するものが多い，イ)地域独自の教材が多く含まれるがそうではないものもある，ウ)現在の学習指導要領にない視点のものも含まれる，ことが見いだされた。

独自性のある内容：目次・項目から副読本に独自の教材を抽出した結果，3つの視点が見いだされた(表4)。「地域教材」はその地方ローカルの教材として社会科の地域学習が想定するものである。「現在の学習指導要領にはない視点」は交通史，学校史，健康のように，過去の学習指導要領にあったものが残り続けているものがある。「自治体のアイデンティティに関する内容」は，誇りとなる自然，文化財，市歌，市民憲章などがある。

表4．独自性のある内容

分類	事項
地域教材	地名，地形，施設，開発事例，人物，観光，地場産業，地域史，年中行事，伝統芸能，災害，地域トピック，など
現在の学習指導要領にない視点	交通史，学校史，健康，など
自治体のアイデンティティに関する内容	郷土，ふるさと，誇り，政策，市歌，地域通史，など

防災教育の内容：防災教育の視点を含む副読本について内容分析を行った結果，全25冊中16冊(64%)に防災教育の記述が見いだされた。記述のある副読本について，記述されている頁数を見ると，総頁中9%以下のものが94%を占めるが，10%以上の大きな比重のものが6%ある(表5)。該当する単元に占める割合では40%以下のものが多いが，単元中半分以上を占めるものが12%ある(表6)。扱われている災害の種類は「地震」(69%)，「水害」(69%)，「土砂災害」(38%)，「火山災害」(13%)であった(表7)。

表5．総頁に占める防災教育の記述

総頁に占める割合(%)	%
10%以上	6
5~9%	25
1~4%	69

注)防災教育の記述がある冊子(16冊)中の割合。

表6．該当単元に占める防災教育の記述

該当単元に占める割合(%)	%
100%	6
40~99%	6
30~39%	19
20~29%	31
10~19%	44
1~9%	13

注)防災教育の記述がある冊子(16冊)中の割合。複数単元で扱われるもの(3冊)が重複する。

表7. 扱われている災害

災害の種類	%
地震	69
水害	69
土砂災害	38
火山災害	13

注) 防災教育の記述がある冊子(16冊)中の割合。複数の災害を扱うものが重複している。

(3) 学習問題(問い)と想定される使用法

学習問題の類型：副読本25冊中、資料集型の2冊を除く23冊(92%)に何らかの形で学習問題(問い)が含まれていた。各冊子、本文、吹き出し、資料すべての箇所において、疑問形で書かれている箇所および学習活動・作業課題を「学習問題(問い)」として抽出し、集計した結果、全973個の学習問題(問い)が抽出された。サンプル事例についてアフターコーディングを行い、学習問題の類型(カテゴリー)を7つに分類した。その後、すべての学習問題を類型別にチェックしてカウントし(1/0データ、重複含む)、集計を行った。

学習問題の類型を表8のように定義した。各類型の問題(問い)の形式と事例は表9の通りである。なお、意思決定に関する学習問題はほとんどなかったため、Fの類型中に含めた。

表8. 学習問題の類型

類型	定義
A. 具体的事実に関する問い(4W1H)	具体的な事実の認識に関する問い。
B. 関係・比較に関する問い	事実と事実の関係についての問い。事実を比較して相違点・共通点を見つけたり、因果関係(1W)・理由を問う。
C. 一般化・説明に関する問い	事実や事実同士の関係について、「特徴」「工夫」「努力」などの概念で一般化したり、説明するための問い。
D. 予想・思考に関する問い	事実の変化について予想したり、事実や説明について思考を深める問い。
E. 価値に関する問い	事実に関する重み付けとしての価値的な言葉を含む問い。
F. 学習者に関する問い	学習者自身の経験、思考、願い、意思決定などについての問い。
G. 学習活動・作業に関する問い	学習者の活動や作業を促す問い。問いの形のものとして、「○○しましょう」という指示の形のものを含む。

表9. 学習問題の形式と事例

類型	形式	事例
A. 具体的事実	誰が? どこで? いつ? 何を? どのように?	「長野県でたくさんとれる農産物は何だろう」「しゅうかくしたりりんごは、どのようにして全国へ送られていくのかしら」「消防団はいつ頃できたのでしょうか」「町長さんの一日のスケジュールはどうなっているのでしょうか」
B. 関係・比較	AとBを比べると、違い(共通点)は? AとBのつながりは? なぜ○○なのだろうか?	「二つの資料をくらべてどんなことがわかるかな?」「長野県と青森県とでは、出荷時期がどのように違いますか。」「○○製造工場は、原料などをとおしてどんな土地とつながっているのだろうか。」「市内のどのお店でも使える商品券を発行しているのは、どうしてなのだろうか。」「どうして巨峰を作ったのかな?」
C. 一般化・説明	どんな特徴(特色)がありますか? どんなひみつ(工夫・努力・しくみなど)があるのでしょうか?	「コンビニエンスストアのとくちょうは、どんなことでしょうか」「農家の人はおいしいりんごを作るためにどんな工夫や努力をしているのかな」「長野市内の各地域にはどんな農業の特色があるのだろうか」
D. 予想・思考	○○するとどうなるのでしょうか? 本当に○○なのでしょうか?	「水道の水は、たりなくならないのだろうか」「このまま、私たちがエネルギーを消費し続けると、どんな問題が起こるでしょうか?」「本当にこれらは「可燃ごみ」なのでしょうか。」「中の市では、どんな災害に備えたいのだろうか」
E. 価値	どんなねがい(夢、喜びなど)があったのでしょうか? ○○を大切にするために、どうしたらいいのでしょうか?	「○○さんはどのようなねがい(夢、喜びなど)があったのでしょうか?」「佐久の人々は、どんな願いや夢をもって鉄道を走らせたのかしら?」「松本の宝であるこの城を長く保存してゆくためにはどうしたらよいか考えてみましょう」「諏訪市を、さらにゆたかな、美しい住みよいまちにするためには、どうしていけばよいのでしょうか」
F. 学習者	あなた(わたし)は○○ですか? あなたの家の近くに○○がありますか? あなた(わたし)はどんなことができますか?	「おまわりさんのしごとについて、あなたが知っていることを書いてみましょう」「あなたの家の方は何の仕事をしているのでしょうか」「わたしたちが、お年寄りとできることは、どんなことでしょうか」「自然環境を守るためにわたしたちは、どんなことができますか考えてみよう」「小布施町の将来の町づくりについて、あなたはどのような願いをもっていますか」

G ・ 学 習 活 動 ・ 作 業	調べてみましょう。聞いてみましょう。書いてみましょう。色をぬってみましょう。話し合ってみましょう。どんなふうにおこなったらよいか？	「聞き取りをするときなど、どんなことに気が付いたらいいだろう」「資料は、どんなふうを集めたらいいのかな」「水についてぎもんに思ったことや知りたいことを調べてみましょう」「調べてみて気がついたことや、もっと調べてみたいことを書いてみましょう」
-------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

学習問題類型の比率：全学習問題(973 個)に占める各類型の割合では、「具体的事実」(68%)、「学習活動・作業」(38%)、「学習者」(16%)が多い(図8, 類型の重複を含む)。

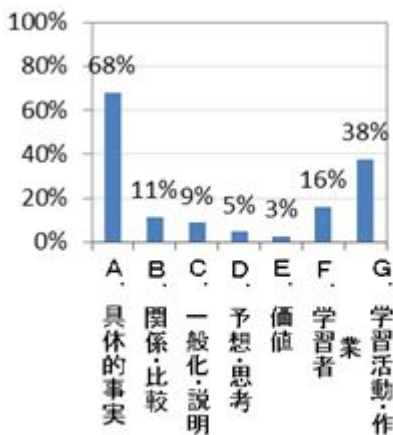


図8. 学習問題類型別比率(全体)

小学校・中学校の学習問題類型：小学校・中学校の各学習問題総数(小 932 個, 中 41 個)に占める各学習問題類型の比率を比較した(図9, 類型の重複を含む)。中学校では「具体的事実」が小学校より少なく(小 70%, 中 34%)、「関係・比較」(小 10%, 中 32%)、「一般化・説明」(小 8%, 中 22%)が多い。「学習者」(小 17%, 中 7%)は小学校が多く、「予想・思考」(小 5%, 中 5%)「価値」(小 3%, 中 0%)はどちらも低い(図9)。

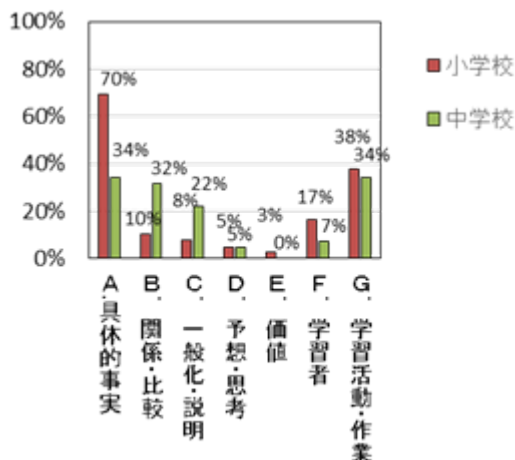


図9. 学習問題類型別比率(小中)

#### (4) 考察

副読本の形態の分析からは、編集者・発行者に関しては多様性が認められるが、使用される学年では小学校の地域学習が中心であり、中学校の副読本は少ない。教科(領域)に関しては社会科が多いが、社会と理科を融合させたものや総合的学習と融合させた副読本も認められ、教科の枠を越えた使用が可能となっている。視覚的には文字資料よりも図表・写真を含むものが多い。

想定される学習形態については6 類型が見出された。このうち「教科書型」が多いことは、副読本を使う教員の指導のしやすさが考慮されているが、学習方法の固定化を招く恐れもある。

内容分析からは、副読本に地域教材など独自性のある内容が多く含まれることや、防災教育の内容など、新しい内容を盛り込んでいることが見出された。これらは編集主体である教員集団(研究会)の意図を反映するものであろう。

学習問題の類型比較において小学校と中学校の学習問題に差があることは、小中の社会科の内容と方法の違いを反映するものである。「具体的事実」「学習活動・作業」の比率の高さは、これらが授業において共通性の高い基本的な問題であることを示している。一方「予想・思考」「価値」の比率が低いことは、これらが授業の中で個性的に展開される学習問題であるためと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

1. 松本康・篠崎正典「社会科における副読本のメディア構成と活用法に関する研究(3) 副読本の学習問題の分析」日本社会科教育学会第66 回全国研究大会(弘前大学)2016 年11 月
2. 篠崎正典・松本康「社会科における副読本のメディア構成と活用法に関する研究(2) - 長野県の社会科副読本における防災教育の内容 -」日本社会科教育学会第65 回全国研究大会(宮城教育大学)2015 年11 月
3. 松本康・篠崎正典「社会科における副読本のメディア構成と活用法に関する研究(1) - 長野県の社会科副読本の作成状況と分析の視点 -」日本社会科教育学会第65 回全国研究大会(宮城教育大学)2015 年11 月

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

松本 康 (MATSUMOTO, Yasushi)  
信州大学・学術研究院教育学系・教授  
研究者番号: 60229581

##### (2) 研究分担者

篠崎 正典 (Shinozaki, Masanori)  
信州大学・学術研究院教育学系・准教授  
研究者番号: 80705038